

I.序

先ほど拝読された第二テモテ2章22節から26節。この箇所から『真偽の分岐点』という説教題で語らせていただきます。

まあ皆さん、ご無沙汰でございます。私はほとんど前しか向いてなくて、このところ皆さんが、礼拝者はどなたがおいでになっているのかほとんど、気配は感じて、このように対面して知ることはできませんでした。このところずっと、礼拝とは何なのか、私は礼拝者としてどういう態度で、どういう姿で、どういう位置で、礼拝を捧げるのか、神様は私に何を願っておられるのか、という祈りを持ち続けて、今こうして立たせていただいています。

まあね、これ新型コロナウイルスという得体の知れないものによって 今 地球上が騒いでいますね。いつこれが収束するのかということは、私達分かりませんもんね。でも神様の目線で今の世界を見ると、やはり「もっと真実な恐ろしいものはあなたがたの内にある罪ですよ。あなたがた自身が持っている罪は、今感染を恐れているそのウイルスよりももっと破壊的な、絶望的な結果を生むですよ。そのためにわたしは、わたしの愛する御子を十字架にはりつけたんだよ。そんなことを忘れちゃいかんでしょう。」私はそういう御声をずっと聞き続けてきました。

II. 神のきよさにあずかって生活する

この22節、これは私が高校生の時から、もう刻み込まれてきた言葉ですね。皆さんもよくご存知ですよ、2章の22節。

『あなたは若いときの情欲を避け、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。』

高校生の16歳の時に洗礼を受けて、この御言葉がもう心に深く刻まれて、そして今日までこの歳になるまで、私にとってこの言葉は常に覚えて従うべきお言葉でした。若くなくても情欲を避けなさい。ここでいわれているご命令は「情欲を避けなさい」ということですね。しかもここではね、すごいこう、杭が打ち込まれるような言葉ですね。「きよい心で」と言うこの言葉です。私の心にはいつもぐさっと刺さってくる言葉でした。聖書全体で旧約聖書の中で常に私たちが心にふれる言葉は“きよさ”です。神様の“きよさ”にあずかって生活するということです。だから神様は人の行為や行動や成果を見ておられない。神は人の心を見ておられる。だから今日礼拝していてもですよ、礼拝しているから今日も守られたなんてね、自惚れている人に対しては「馬鹿野郎、お前礼拝してねえじゃないか」という神様の声もあるわけです。

心はしっかりと神に向かってきよくされているか？神のものとされているか？「義と信仰と愛と平和を追い求める」。まあいいことのように見えますよね。言われなくてもわかってらいて、そのくらいのこと。今の時代ってそうじゃないですか。でもこれは、「義」が最初に来るってことは、神様の御前で礼拝者にふさわしく、神様のものとされて義とされた者の生活の中での結実が、信仰と愛と平和ですよっていうふうに取り取れますね。だから今私たちのこの日本における風潮としてはですね、必ずしも信仰は否定されていないけれども、その信仰が人を高ぶらせ、醜い結果を生じさせている、ということも事実です。愛はいいもんだ、と誰も手を挙げます。けどもその愛による所有欲によってどれだけの人が奴隷になってるのでしょうか。善悪の基準から外れてしまってるのでしょうか。みなさん忘れちゃったと思いますけど、国会議員がね、このコロナウイルスの警報が発令された日に、歌舞伎町に遊びに行っただけで後で発覚したんですね。我々が選んだ国会議員が、気をつけようぜって言ってた時に気を付けてなかったんですよ。もう忘れちゃったでしょう。小さな記事です。でもこれ現実です。愛という名のもとに悪いことをしている人はいっぱいいます。平和を求めてんだよね。でも平和を求めていながら、その平和平和という中には妥協ばかり。一本筋が通ってないんですよ。“きよさ”が失われた平和は、妥協でしかない。だから政治って妥協ですよ。今僕が一番気の毒なのは私たちの国の総理大臣だと思います。強いリーダーシップをみんなに求められ要求されているながら、それに応答できない彼自身は気の毒ですね。だから顔を見るのがつらいです、テレビで。僕は。これ僕の感性で皆さんの感性とは違うかもしれませんがね。だから信仰・愛・平和だって腐ってるんですよ、今。教会のね、なんかね、お題目のように信仰・愛・平和なんて言ってたってね、教会にそれがなかったら、何の礼拝ですか、何の信仰ですか、何の人生ですか。私達はふざけて礼拝をささげていないでしょ。

Ⅲ. 主のしもべとして生きる

23 節 24 節 25 節はね、これはエペソの教会の現状がよく表れてるんですが、エペソの教会ってというのはその当時のアジアの大都市ですよ。アルテミスという女神様がおられるんですよ。長野の善光寺みたいな、あれよりも大きな神殿を石で作ってたんですよ。でも地震で崩れちゃいましたけどね。いまかろうじて、“この辺にあって、このくらいの高い柱が立っていたよ”って観光客には教えてくれる。もう見事なすごい神殿。トロイの町のわりに近くにあるんですよ。そういう中に教会は生まれました。そういう中でクリスチャンたちは証しをしていました。イエスキリストが神であると礼拝する者はわずかであるにも関わらず、教会が生まれたんですよ。春日部福音自由教会みたいなもんだね。これはね、本当に神様のなさることでエペソにキリスト教会が生まれたってというのは本当に産みの苦しみに産まれたんですよ。だって優秀なテモテをパウロは牧師として遣わしたんですね。そういう背景があるわけです。彼が苦しんでいるのは、40 代ちょっと過ぎたぐらいかな、その牧師がですね、もうね、テモテはものす

ごく苦労しましたよ。だって入ってくる人たちが自分より経験があって知識があって学問がある人たちが、みんなを扇動してるわけですよ。偽教師ですよ。もうぐしゃぐしゃに揺れ動くような教会の中で、テモテはみ言葉を語り、明確にイエス様の御心を語り続けなければならない使命が与えられていましたね。そのことがこの23節以降、これすごいでしょ、無知で愚かな議論、それは争いの元である。避けるべきこととしてまずパウロはテモテに言いましたね。

「若い時の情欲を避けなさい」そしてもう一つは「無知な論議は避けなさい」。皆さんそういうこと敏感に感じてますか。なんか知ったかぶって話す人が多いじゃないですか。知ったかぶり、これね、本当に嫌われますよ。僕は経験がありますから。知らないことを知らないという勇気は知恵です。そしてね24節の頭に、「主のしもべが争ってはいけません。」“主のしもべ”って“しもべ”という言葉、この言葉はね、旧約聖書では非常に重要な意味があります。それはメシアの象徴としての言葉なんです。だから新約聖書になってからこのようにして「主のしもべ」と言うことが、本当に教会の中で流行したわけですね。だから皆さんだってお祈りの時に「しもべ」という言葉使ってるでしょ。でも本当に「しもべ」かい？「しもべ」ってというのはね、一番ペケって意味だよ。後ろ向いたら誰もいないんだから。ペケに控えている人間が「俺の名誉、俺の自尊心を傷つけた」って怒ってるのはどこの誰だい？手挙げい、っていうことになるじゃないですか。教会の中で「主のしもべは争ってはいけません。争いの原因を作ってはいけません」て、これ難しい修行ですよ。だって生きてること自身が争いの原因になるんだから。そうでしょ。だいたい争いはどこから起こるか。争いはどこから起こるって聖書は言ってますか？これヤコブが明確に説いてますよね。「からだの中の欲望からではありませんか」ヤコブ書の4章1節。「からだの中の欲望が争いを生む」という時のその欲望とはなんぞや。これはね、心の病のあらゆる元凶のもとと言われている、神学的用語を使うと“自己義認”ということです。ルターはこれと戦ったんですよ。「自分は正しいんだ、あいつが間違ってるんだよ」「牧師が間違ってるんだ」「いや、俺は正しい、信徒が間違ってるんだ」これはさ、感性が違い意見が違い、神学が違い哲学が違い価値観が違う人が、こういう交わりの中に出てきたら、すぐ生じますよ。エペソの教会はこれと戦ったんですね。あのね、そういう人たちを排除することは簡単です。教会って簡単に壊れるよ。私たちが問題を起こす原因は「自分は一生懸命やっついて認められるべきだ」「高橋牧師は俺の存在を認めるべきだ」「俺が挨拶する前に挨拶すべきだ」ってね。いや生意気に信徒のくせに思ってる人が結構多いよ。これ事実ですよ。だけどそれで高橋牧師がね、そう言うことに乗ってヘラヘラしたら、また逆に「権威のない牧師だね」って、笑われるんですよ。偉ぶってもおかしいし、謙遜のふりしてもおかしいし、じゃあどうすりゃいいの？自分自身を何者かっていうことを知る、という認識は何か。「私は主のしもべとして生かされているんだ。私は仕えるために生かされているんだ」。上からなんと言われようと下からなんと言われようが、同僚からなんと言われようが、しもべとしての思いを貫き通す、これが私たちが主として今日仰ぎ賛美しているイエスキリストの御

心です。ベツレヘムからゴルゴタまでイエス様はこの心を買き通されました。だから主のしもべは争ってはいけません。牧師がそうならば皆さんもそうです。「自己義認を放棄する、十字架につける」これがイエス様の弟子に対する、もう超厳しい訓練でしたね。本当に従って来たい、本当に礼拝したい、本当にイエス様を信じる。「主よ」と呼ぶならば、「自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従え」。できてます？。ちょっと。真面目に聞いてますか？口先だけで神様とかね、神学とかね、聖書の解釈とか言ったって、自分の生活が主のしもべとして、礼拝者として、今ここにいないならば偽り者ですよ。義はない。神様に認められる義はない。ルターの神学を否定しては。ルターの神学は信仰義認を貫いたことです。自己義認を否定したことです。今日気の毒ですね、僕の説教でこんな、なんか慰められて癒されたくて、もう疲れを取ってってもらいたくて来たのに、今日の高橋牧師の説教は肩凝るなって。たまにはねこういう厳しい説教を聞かないとね、皆さんは腐っちゃうよ。自分の耳障りのいい話を求めるようだったらね、そんなのね、もうね腐ってんな。だから主のしもべの牧師としてもあり方は何かって言うと、ここでは「忍耐深く教えなさい」って、そういう風に言うわけですよ。よく忍耐して、柔和な心で教え、導きなさい。その次に“悔い改めの心”ってあるでしょ。これは聖書全段を通してすごく意味がある言葉ですよ。見過ごしにできない。でも悔い改めの心って、私たちは体験したんだけど、どうしてこの悔い改める心を持ったんですか？この心こそ、きよい心を保つために神様がお与えくださったキリストの心ですね。悔い改める心は愛を知る心です。本当に十字架の愛を知っている人は、何回でも悔い改めます。最後の一息までも悔い改めて礼拝者として導かれる。それが悔い改める心です。だからすごいでしょこれ。教会を乱してぐちゃぐちゃにしてるような人間だって「忍耐深く寛容な心で、柔和な心で祈り続けて関わっていたら変わるかもしれないじゃない、だからぶん殴りたくなくても殴っちゃだめだよ」って言ってるんですよ。「一時的な感情で永遠の祝福を失っちゃだめだよテモテ」って言ってるんですよ。これが神様の心です。そうでなければ皆さん、私も含めてですけど私はこうして御言葉を語ったり、皆さんに心から語れるような者として今あるのは、今私が礼拝しているイエスキリストのおかげです。イエス様が今日まで、16歳の私を今日まで導いてくださった。だからね、あなたがね、一応母親と呼ばれ父親と呼ばれクリスチャンと呼ばれ、社会でそれぞれの働きをさせていただいてる。この背後にどれだけの神様の忍耐があったと思います？御霊のとりなしがあったと思います？神様の大きな憐みに包まれて、私たちは悔い改める心を一度ならず二度ならず、ずっと悔い改めの連続で礼拝者として今日まで守られてきたんでしょ。「じゃ、えらいところ一つもないじゃないかよ、それをなんで威張ってんだよ」って僕は言いたい。それを本当に、しみじみと感じ取って生きていることが主のしもべとして仕えるって事です。親にさせていただく、教師にさせていただく、牧師にさせていただく、奉仕者としてさせていただく。だから今あの熊本とかね、あっちもボランティアの方がいっぱいいる。ああいう人たちの態度って本当にしもべの態度ですよ。あれ俺たちボランティアでしてあげてるんだ

ぜなんて思いをしたら、追い出されちゃう、いられないと思いますよ。この基本的な奉仕者の態度、キリストの態度が礼拝者なんです。本当に心から悔い改めた心でお仕えする。

IV. 武具としての祈り

でね 26 節。突然のようにね、「悪魔に捕らえられて思いのままにされている人々でも、目を覚まして、その罠を逃れるかもしれません。」って、とんでもない言葉が書いてあるんですね。テモテへの生の言葉です。私たちは悪魔の策略について、エペソ書からよく教えられました。悪魔の策略を逃れることはできませんね。今のひどい疫病のような、恐ろしい力を持っています。だからテモテの第一の手紙の 4 章の冒頭で「御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。」という警告がなされて、テモテが牧会者として戦っているのは、悪魔との戦いだよっていうことを明らかにします。ここでも明らかにされます。悪魔の策略の私たちが惑わされやすいのは、「信じている」「礼拝をしている」「賛美をしている」「奉仕している」という感覚を持ってはいるけれども、実際に神様の臨在、神様と共に歩む、という本当の信仰者の生活が壊されている。これね、徐々になるんです。洗礼受けたときはいい。3 年ぐらいまではもつ。だけど 5 年 10 年経つとなんだか形骸化されたキリスト教徒になっている。これは悪魔の策略です。良心が麻痺する。慣性の法則だけで動いてる。だから後は止まるだけです。気をつけたまえ。これが悪魔の策略です。聖書読んでても、「今日果たすべきノルマは終わった」と。だからね、そういう信徒とかはね、“僕、今日はね、ちゃんと読んできました”って言うので、“うるせえ”って言うんですね。当たり前なことは黙っている。それが礼拝者ですよ。だからほとんどクリスチャン、あるいは牧師が、あるいは執事が墮落していくときというのは、本当にいっぺんにじゃないですよ、少しずつですよ、少しずつ。それは本当に神のしもべは気づきます。悪魔の策略に対してあのエペソ 6 章で、パウロはいろんな武具をあげた後ね、最後の最後の武具として“祈り”とあげてるんです。「忍耐の限りを尽くして祈りなさい」。だから私たちがこの今の世にあって、悪魔の策略に対して勝利するためには祈りしかない、ということとはパウロの書簡の中で非常に明確化されて教えられています。祈りです。ところでね、祈りってほんのちょっぴりでも希望がなければ普通は祈れないと思うじゃないですか。本当に真っ暗闇の絶望の中で、なお祈れることが祈りです。イエス様が教えられた祈りはそれです。イエス様の祈りは私たちに祈ることの厳しさ、祈りの戦いを教えてくださっておられます。今こういう疫病の蔓延している中で、まあコロナウイルスに対するワクチンとかそういう抵抗力を持たせるような薬とか早く出たらいいなという希望の中で 皆待ち望んでると思うんですよ。でもそういうものが全くなくなって、もう完全にこの地球上、今の疫病のウイルスにも囲まれちゃったとしたら、あなたはどうします？私そういうこと考えてたんです。聖書は私たちに「最後の望みのともしびさえも消えても、祈れ」って教えてんですよ。「祈り続けなさい。忍耐の

限りをもって。」祈るってのは神様に対する信頼、本当に信じてるって言う証ですからね。苦しみ抜いて殺されるその時にも、なお祈り続ける。期待できないにも関わらず、神様はおられるという信仰だけはその人の心から失われていない。これが祈りです、礼拝です。ヨブという人はそういう人だったよねってヨブ記は書いたんでしょ。だから私たちの信仰は、私達は今日礼拝者として もう ともしびさえも見えない、希望の光なんてない、という人も礼拝をささげて、神様を信じて生きて死にましよう。それでどうなるの？それで神様がちゃんと結果を、神様が責任を取ってくださる。私たちの人生ってそうではないですか？悔い改めの心。私はこの髭を伸ばした時に、アメリカの貿易センタービル、私昇ったことあるんですよ、アメリカの人に連れられて。“これが 高橋さん、貿易センタービルだよ”って上まで行って、あまり面白くなかったんですけど。でも今もうないんですよ。あれが壊された時、私は「そうだ、この世界の平和のために、争うことをやめるように、願をかけよう」って髭を伸ばし始めたんです。床屋に行くたんびに、高橋さんみっともないからちょっと切るよって、この間切られちゃった。これ僕の祈りなんですよ。世界は何回も危機を迎えてきました。繰り返し。でもこれを伸ばした時にね、与えられた御言葉があります。「私のたましいは黙ってただ神を待ち望む。私の救いは神から来る。」そう祈る時、私は何をしていますか？こういうのは教えてません。お前寝てるじゃねえか、なんて言いません。ただ黙って神を待ち望む。だからともしびが見えなくても、信じている神様に対する信頼が失われてない。これがすごいプレゼントですね、賜物ですね。そしたら私の救いは神から来る。ここが真と偽りとの分岐点です。あなたが礼拝していることは分岐点ではないんですよ。聖書を読んでいることが分岐点ではない。神様を信じ続けて従っているか。あるいはそれを退けて、悪魔の策略に今日一歩でも加担するような生活をしているか、ここが分岐点です。では祈りって何ですか。私にとってこの疫病が流行っている間の祈りとは、黙してただ神を待ち望むことでした。この礼拝においても私はそうしたいと思って礼拝を今日もささげています。

5. 結びの祈り

憐れみ深い神様。私たちの礼拝があなたに真に受け入れられる礼拝でありますように。そして私たちが、どのようなことがこの世界で起こっても、ただ神様の救いを待ち望む者とさせてください。私たちの信仰こそ命です。主イエスキリストの御名によってお祈りをささげます。アーメン。